

第9期地域科学技術イノベーション推進委員会（第1回）における論点整理
(第1回委員会での主な委員意見より)

I. 地域の科学技術イノベーション活動の基本的方向性

(1) 科学技術イノベーション振興政策における地域の捉え方（範囲、主体）

- 「地域」の定義、範囲をどう捉えるべきか。
- 地方の場合、構成要素としては自治体と大学がほとんどであり、VCなどの役割は極端に小さい（主要プレイヤーの固定化）。
- 一義的には「地域」の範囲は定まらない。「地域」は重層的に捉える必要がある。

(2) 地域が科学技術イノベーション活動を行う意義・目的

- 「地域発」の科学技術イノベーションと「地域着」の科学技術イノベーションがあり、特に後者の科学技術イノベーションとは、社会課題を解決し、そこから産業的価値及び経済的価値を生み出していくこと。
- 「地域科学技術イノベーション」とは、「地域の強みから生み出される革新技术が地域内での新たな融合を誘発することで生まれるイノベーション（技術開発型イノベーション）」と「地域内での革新的な組み合わせから生み出されるイノベーション（新結合による富の創造）」が存在。（事例研究で、各地域に当てはまる共通項目と、各地域に任せる個別項目を丁寧にあぶりだし、成功の鍵を見つけることが必要）
- 「地域科学技術イノベーション」とは、「科学技術」発イノベーション（グローバルに展開可能）と「地域課題」発イノベーション（地域の不便、不満、不安を解決するためのイノベーション）がある。
- 地域イノベーションの類型については、扱うイノベーションによって、発生地域が異なる。
- どの地域でも通用するようなシステムとして、地域イノベーションを捉えることが重要。

(3) 地方創生の流れにおける科学技術イノベーションの位置づけ

- 「地方振興」とは、「当該地域に定着する人を育てていくこと」と「地域の課題を大学が代わって解決する（研究開発も含め）こと」。
- 様々な社会課題を各地域は抱えていることに鑑みると、課題先進国である日本の地域が主体という視点は重要。
- 「リープ・フロッギング」。イノベーションは既存の延長ではなく、新結合による富の創造が重要。今の時代、「地域」には何があって、何が足りておらず、どういった結合が必要なのかを確認することが必要。

II. 国内外の地域科学技術イノベーション事例からの教訓

- 世界の成功例をそのまま日本に持ってくるだけではうまくいかない。どこを取り入れて、どこを自分たちで新しく作っていかないといけないかを見極める必要がある。
- 北欧の例に鑑みると、日本の地方でも自治体がリードする形でイノベーションを起こすクリティカルマスはある。
- 世界のイノベーションのホットスポットを例に見ると、それらは人が集まりやすい環境であると同時に、アントレプレナーシップがあり、それを支える環境があるところ。人が集まりたいと思うためには、有能な人材があり、資金が集まりやすく、裕福な市場が近いということ。
- 海外事例からインプリケートされるイノベーションを地域で起こすために重要なポイントは以下のとおり。
 - ✓ 大学が産業に近く、産業に近いことをしている大学を皆がリスペクトしている
 - ✓ 地方政府が強く、産業をリードしている
 - ✓ 学生を大学と産業界の間でうまく使う（労働力として）とともに、それは学生にとっても就職活動に繋がるといった好循環が生まれている
 - ✓ 広報活動がうまい
 - ✓ ネットワーク、人を集めることに重点がある

※今後、地域の主な主体（大学、自治体、地域中核機関、地方金融、認定 VC）や海外調査機関等からヒアリング予定

III. 地域の科学技術イノベーション活動の置かれている現状及び課題

- (1) エコシステムの形成（主体性、持続性、広域連携）
 - 地域における広域連携によるイノベーションは日本に少ない。
 - システムとして地域に科学技術イノベーションが残らないのは、ビジネスモデルが考えられていないため。
- (2) 研究開発・社会実装活動及びそのマネジメント（確実性、総合性）
 - 出口が見えず、地域の産業として生き残っていけるか分からないプロジェクトがいくつか見受けられた。
 - 地方における企業サイズは中小・零細企業であり、そこでの「研究」は皆無であることから、地方が自発的に「科学技術イノベーション」に取り組むことは難しい。
- (3) マネタイズの仕組み（自立性）
 - 地方の場合、構成要素としては自治体と大学がほとんどであり、VC などの役

割は極端に小さい（主要プレーヤーの固定化）。

- 地域科学技術イノベーションの課題として、「金の切れ目が縁の切れ目」となっている。
- お金が無くなると、次のステップに繋がっていかない。最終評価が終わるとそこで終わりとなってしまい、ブレーキがかかる。

(4) 人材の確保及びプレーヤーの役割分担

- 地域を引っ張っていくというコーディネーターがあまりいない。プロジェクトの資金をうまく回していく程度にとどまっており、地域の企業のニーズと大学のシーズを連携させるといったところまで役割を果たし切れていない。

IV. 課題解決に向けて、今後国及び地域（各主体）に期待されること

(1) エコシステムの形成（持続性、広域連携）

- 地域の特徴（例：気候、産業、人材等）を生かして、「科学技術イノベーション」に自発的に地域が取り組む仕掛けづくりが重要。
- イノベーションは変化。変わっていくことへの受容性が大事であり、既存のルールを壊していくことが求められる。
- 地域科学技術イノベーションを行う拠点となるような法人組織を自治体がつくり、動かしていくために国が最初の段階でどこまで支援できるか。
- 地域の強さを活かしたクラスターを戦略的に使い、東京中心ではない広域の地域イノベーションを作り上げていくことが必要ではないか。
- 地域のやりたいこと、できること（＝「科学技術」発イノベーション）、求められること（＝「地域課題」発イノベーション）の3点がうまく組み合わせられないとキャッシュはフローしない。これらをうまく調和させた施策を国が打てるかどうか。

(2) 研究開発・社会実装活動及びそのマネジメント（確実性、総合性）

- 「社会実装」の成功要因は、最初の研究開発の段階から、社会実装を行うことまで見据えたチームになっているかといったチームメイキングと中長期的な科学技術の価値を地域の中小企業に意識づけさせるような参画する人達の意識改革。

(3) マネタイズの仕組み（自立性、主体性）

- 「地域」に「科学技術イノベーション」の取組が根づくためには息の長い取組が必要。
- 「お金の匂いをさせる」ことが重要。経済学的な活動に結び付かないものは持続性がない。
- 経済価値をつくり、富の循環を起こしていく施策にすることが重要。

- 市場の失敗が起きているような、国こそがテコとなって動いていくような分野に施策を打っていくことが重要である一方、最終的に地域が自立するためにはどこまで国が支援すべきなのかを見極めることも重要。

以上